

膵IPMN・通常型膵癌の合併

イムス札幌消化器中央総合病院消化器病センター 丹野 誠志

KEY WORDS

- 膵管内乳頭粘液性腫瘍
- IPMN
- 通常型膵癌
- 膵癌高危険群

Development of pancreatic ductal adenocarcinoma in patients with IPMN of the pancreas.

Satoshi Tanno (院長)

はじめに

1982年に大橋らによって報告された粘液産生膵癌は、粘液産生性の腫瘍性膵管上皮が膵管内に乳頭状に増殖する膵腫瘍であるとの疾患概念が確立され、その後いくつかの名称変更を経て、現在の膵管内乳頭粘液性腫瘍 (intraductal papillary mucinous neoplasm of the pancreas; 膵IPMN) の名称に統一された。

膵IPMNはそれ自体がadenoma-carcinoma sequenceとして知られる癌化リスクを有している。このため、IPMN病変の正確な良悪性診断は、膵切除か経過観察かの治療方針を決めるうえで重要である¹⁾⁻³⁾。

このIPMN自体の癌化リスクに加えて、IPMN症例では同一膵内にIPMNとは別に通常型膵癌を合併するリスクのあることが近年明らかにされつつある⁴⁾⁻⁸⁾。このようなIPMN症例における通常型膵癌の合併リスクは、膵癌に

比べて予後良好な腫瘍と考えられていたIPMNの新たな問題として大きな関心を集めている。

本稿では、膵IPMNと通常型膵癌の合併について、最近の知見を交えて概説する。

I. 膵IPMNにおける通常型膵癌の合併頻度と標準化罹患比

膵IPMNには主膵管型、混合型、分枝型の3病型がある。それらのなかで、通常型膵癌の合併について、最も詳細に検討されているのは分枝型である(図1)。

図2に通常型膵癌を合併した分枝型IPMN症例を提示する。分枝型IPMN症例における通常型膵癌の合併は、国内を中心に複数の施設より報告されている⁵⁾。表1に示すように、分枝型IPMN症例における通常型膵癌の合併頻度は1.4~9.3%と報告されてお